

曾國藩の哲學

——日記を中心にして——

本田 濟

曾國藩（一八一—一七二）、字は伯涵。溧生と號する。道光己亥（一八三九）十二月廿一日の日記によれば、溧とは舊染を溧うの意。生は哀了凡の語「従前種々、譬えば昨日死するが如し。従後種々、譬えば今日生まるるが如し」の生の字を取った、という。

湖南省湘郷の人。家は代々農家である。曾家六百年の間に官界と關わりを有するに至ったのは、國藩の父麟書が生員となったことを以て嚆矢とする（『曾文正公文集』三、臺洲墓表）。

道光十八年（一八三八）、國藩は二十八歳で進士に及第、翰林院庶吉士となる。李瀚章が國藩没後に上った表によれば、翰林に入ってから國藩は、倭仁・唐鑑・何桂珍と程朱の學を講明した。そのことが彼の克己省身に役立っている、と（『清史列傳』）。日記のなかに唐先生の名は特に頻出する。その影響の大なること、想像に難くない。

以後、國藩は順調に出世し、道光二十九年（一八四九）には兵部左侍郎となる。翌三十年（一八五〇）、廣西に太平天國の亂が起る。咸豐二年（一八五二）、國藩四十二歳。官は吏部左侍郎。母の喪に遭い、郷里に歸る。當時、賊は武昌を陥れ、江南は震駭した。勅命により、國

藩は湖南巡撫張亮基とともに團練を組織する。以後、弟の國荃、左宗棠、李鴻章らを率いて各地に轉戦した。

同治三年（一八六四）、金陵を克復。十五年にわたる大亂は終熄した。國藩、時に五十四歳。詔あり、太子大保を加えられ、世襲の一等侯爵に封ぜられた。

以後、山東の捻匪を平げ（一八六七）、天津におけるフランス領事殺害事件を調停する（一八七〇）などの苦勞があった。同治十一年（一八七二）二月、病卒。六十二歳であった。

『曾文正公詩集』、『曾文正公文集』各三卷のほか、歴大な手書の日記が残っている。道光十九年（一七七九）國藩二十九歳の年に始まり、同治十一年（一八七二）二月三日すなわち國藩六十二歳の死の前日まで、一日も缺かさず記されたらしい。ただし道光二十五年（一八四五）三月から咸豐八年（一八五六）五月までの部分は原本が失われている。一九〇九年発行の石印本、學生書局版影印本がある。

日記の内容は、日常の茶飯事が最も多くを占める。天候。早く（或いは晚く）起きた。誰から手紙が来た。誰と會った。誰と碁を打った。何の書を読んだ。何時に眠った（或いは眠れなかった）など。

次に注目すべきは、日常生活に觸れての後悔、自責の言葉。晩年に

至つてもこの種の語は跡を絶たない。若い時とでは内容やニュアンスに差異はあるが。

第三に議論めいた敘述。師友の言の引用もある。或いは爲學の法を論じ、或いは修養法を講ずる。時に文章を品臨し、詩を評論する。

筆者は恐らく他人に見られることを豫想しなかつたであらう。この上なく率直な記録である。右の第三の部類には國藩の哲學を直接に物語る堂々の論が見られ、『文集』にそのまま移してもおかしくないものもある。しかし私が同等の興味を覚えるのは、第一類の日常茶飯の行動のなかに、城隍廟に參るとか(庚子十一月十五日など)、妻の病氣に祈禱をするとか(後出)、この人の表むきの議論とは矛盾するような事柄が平然と出てくる點である(『二程遺書』二二上に、城隍は不典の神だと)。

概して中國の文人には、公けの面に於ては正統の儒教的哲學を奉じつつ、私生活の面では老莊佛敎に參入するといった傾向が多く見られる。曾國藩の場合には最も儒敎倫理に忠實なように見えながら、散文と詩とでは時として雰圍氣の差異を覺えしめるものがある。建て前の思想と私的な面での生活感情がどう關わるか、どうして調停されるか(或いはされないか)。こうした問題を探るためには克明な日記に頼るほかはない。

程朱學の倫理は嚴格主義といつてよい。さて、この學を奉ずる者が、日常如何なる程度に「人欲を去つて天理に復かへる」ことを實踐し得たであらうか。曾國藩は正直に人欲と苦闘した。その前進或いは蹉跌の實驗過程は赤裸々な日記に頼つてこそ窺い知ることができる。

二

先ず最も平穩な日の記述例を示す。

甲辰(一八四四、國藩三四歲)正月初一日。寅初に起く。寅正、朝ちやうに趨き慶賀す。辰初、朝より退く。會館に至りて神を敬し、旋まわち寓あきに歸る。飯后、客を拜し、酉初に至り方かためて散歸す。是の日、車夫の爲めに忿怒すること三次。

これより前、家じゅうが痘症にま惱されたことがある。

己亥(一八三九、二九歲)正月廿九日。陰雨。辰刻、滿妹死す。余、尙お未だ起きざりき。時に叔淳弟の痘亦た密、甚だ危し。家中哭泣すれど、敢て聲を出さず。叔淳を驚かさんことを恐るればなり。滿妹は道光十年庚寅八月初八日辰時に生まる。是こゝに至るまで生くること八歳零一百七十一天。滿妹の病むや、全く澄侯の湯藥を調え、床褥とこに扶持するに頼る。余甚だ未だ手足の情を盡さず。廿三日より常に補劑人參鹿膠を服するも、竟つひに濟すくう能わず。痛ましい哉。是の日棺を買い、五千錢を出す。斂葬れいさう皆な薄きに從わず。油麻沖あぶらまに葬る。滿妹死に臨んで、遍く家中の人を呼ぶ。獨り兒子植第ちぢを呼ばず。其の危きを知ればなり。

幼い末の妹の臨終の情狀を寫して惻々たるものがある。巧まらずして歸有光の肉親を悼む文、或いは袁枚の妹を祭る文に似た感傷がただよっている。これに比して八年後に草した滿妹碑誌(『文集』三)は、冷靜であるだけに常套的で瘦せた感じを免れない。その一節、「生まれながらにして善諱ぜんごん、旁かたがはく捷警てつけいを出す。諸昆弟姉妹並ならび坐するに、黠たくき者と雖も相勝つ能わず。然れども端靜たんじやうに歸し、笑わらい矧しづに至ること罕まれなり。道光十九年正月晦日、痘を以て殤せうす」

戰爭中の日記は船幾艘とか砲幾門とかの覚え書が多いが、風流韻事を全く忘れてはいない。

戊午（一八五八、四八歳）七月廿日。辰刻、望湖亭に在り宴に赴く。

亭は雪梨方伯の丁巳六月に修めし所。往年に比して兩層多し。全湖の勝を攬るに至る。雪梨、余に聯句を屬す。余、聯を爲りて云う、五夜樓船、曾て孤亭に上りて鼓角を聽く。一尊の濁酒、重ねて此の地に來りて湖山を見る。

弟が戦死した時でも日記は概して感情を抑えた淡々たる敘述である。なかには次のような語もある。

辛酉（一八一、五二歳）二月初九日。三更四點、信に接し、凱章・雲岩・桂生、本日上漢口に在りて大いに勝杖を獲たるを知る。これが爲めに喜慰。以後即ち寐を成す能わず。

以下、晩年の日記の一部を示す。

庚午（一八六九、五九歳）正月廿八日。内人病み、又た反覆して紀澤病みて己に半月なるに因り、焦慮殊に深し。

二月初一。室に在りて私かに禱る。

五月三十日。此の生、一も成る所無く、挽救すべき無し。而も目下天津の洋務十分に棘手。焦灼に勝えず。故に僅かに筆記小説を閑すれども、此の心實と未だ片刻も恬愉せざるなり。

右の洋務とはフランスとの紛争をいう。

閏十月廿五日。夜間小便す。偶ま便壺の側らに在る無し。起床裸行す。甚だ以て苦と爲す。近來多く毎夜兩次小便するは、亦た衰微なり。

辛未（一八七一、六一歳）三月初八日。内人病い亦た日に重し。家中奢靡散漫。豪も整肅の象無し。深く以て愧と爲す。

三月十九日。内人病い日に危篤なり。兒輩、洋人の診視を請う。心甚だこれを非とするも、姑くこれを聽す。

さて國藩の死の数日前、

壬申（一八七二、六二歳）正月廿三日。錢子密來り一談。語次、余が右脚麻木不仁なり。旋即發顛し、抽掣動風の若き者あり。良久しくして乃ち止む……傍夕小睡す。夜、宋元學案の呂東萊一巻を閑す。二更後、兒輩の與に孟子の定於一章を講ず。又た呂氏學案を閑し、三更に睡る。

日記によれば國藩は、兵馬倥傯の間にも讀書を缺かさなない。その種類は經史子集にわたる。就中、經書などは何度も飽きずに温習している。その讀みかたにしても、例えば易の睽卦を讀みながら、上九と六三は自分と某との關係に相當すると思ひ當つたり（一八四二壬寅十月十三日）、體中不和の氣を發散させるため『孟子』の數章を朗誦したり（一八七〇庚午七月十七日）。わが身の修養に資するためというか、寧ろわが血肉に滲透したものを再確認するための讀書であるらしい。死の前年の辛未（一八七一、六一歳）八月九日に至つては、「これから後は、未見の書物を讀むまい」と誓っている。經書というものが、これを信ずる人にとって、いかなる効用、比重を有したかを見るに足る。

三

曾國藩の日記を讀んで最も衝撃を感じるののは、その自戒の嚴しさである。この點については小島祐馬博士がすでに述べておられるが、『中華六十名家言行錄』曾國藩、繰返して取り上げる。

辛丑（一八四一、三二歳）九月初一日。是の日早く起く。吃煙して口苦く舌乾く……誓つて今より永く吃煙を禁ぜん。水煙袋をば撞

碎す。

曾國藩は阿片吸飲の癖にとりつかれていたのである。これが仲々やめられない。

壬寅（一八四二、三三歲）十月廿一日。念うに毎日昏鈍なるは、喫煙多きに由る。因つて立ちどころに煙袋を毀折し、誓つて永く再び喫煙せず。

ところが、その翌々日の日記には、

乃ち初めて喫煙を戒めしを以て乳を失せし如く旁皇す。一番の自ら怒さんとするの意思を存す。

とある。今一つの悩みは、

壬寅十一月初四日。午初、人欲横熾。復た制する能わず。眞に禽獸なり。

十一月十六日。歸りて房闔大不敬。一大惡を成す。細思するに新民の事、實と此れより起り、萬化闔門に始まる。刑于（寡妻）除り以外政化無し……此れをこれ謹まず、何を以てこれを力行と謂わん。吾れ喫煙を戒めてより、將に一月ならんとす。今は差定まされり。以後、余、三戒あり。一は喫煙を戒む。二は妄言を戒む。三は房闔不敬。一日三省。これを慎めよ、これを慎めよ。小島博士によれば房闔不敬とは日中閨房に入ることを指すと。これがまたやめられないこと、癸卯（一八四三、三三歲）三月二日、甲辰（一八四四、三四歲）四月廿八日などの日記に見られる通りである。

三戒のうち妄言とは何か。

壬寅十一月廿七日。細思するに日々の過惡は總て是れ多言。其の多言なる所以は都て毀譽の心より起る。

癸卯（一八四三、三三歲）二月初三日。毎日言語の失、直だ是れ鬼

賊（詩小雅何人斯）の情狀。其の他を問うに違あらんや。

自慢したり他人の惡口を言つたりすることらしい。友人の陳岱雲は國藩を戒めて「自信過剰で、身の程知らずに他人の胸中に入らずか入りこみ、完膚なきまでにやっつけるところがある」と言う（壬寅十月三日）。邵蕙西は、國藩には「一、慢。友人に無禮である。二、自是。自分の意見を固執する。三、偽。他人に幾つもの顔を見せる」という缺點があると指摘する（癸卯二月十二日）。

ところが國藩に悪いところがあるにせよ、右の友人もまた「完膚なきまでに」言いたいことを言う人々である。彼らは國藩ともども道學を語り合う仲である。戴震などは、道學の弊として、自分の道理と信ずる所を他人に押付ける苛酷さがあるという。この友人にもそういう臭味が無いではない。國藩のほうは「直なるかな岱雲」と感謝しているが。

惡口だけではない。戲謔もいけない（壬寅十月十三日）。また、心にもない世辭を言うこともいけない。「客が八股文を示したのを、心にもなく口先だけで褒めてやった。これは孔子のいわゆる巧言令色で、自分の悪い癖だ」（壬寅十月十四日）。同時に、他人の世辭を喜ぶことも自戒せねばならない。「友人が訪ねて来た。自分の詩を褒めてもらいたくて、うずうずした。何と卑しいことか。かような譽を喜び毀りを惡む心は、商人が損得を患える心と等しい。」（壬寅十月八日）。

三戒のうち喫煙は「差定ま」ったあと、やめたらしい。房闔不敬も咸豐八年戊午（一八五八、四〇歲）以降はほとんど見えない（戊午四月廿六日に箠欲立誓とあるが何を指すか不明）。言語の過ちについては晩年まで反省を怠らない。國藩が、當時の考證學派と程朱學派とが互いに口を極めて罵倒し合う風潮に對して常々苦々しげな口吻を漏らすのも、右

のような自戒と無縁ではあるまい。

戊辰（一八六八、五八歳）三月廿五日。是の夜、紀澤と爲學の道を論ず。經率に古人を評議すべからず。惟だ堂上にして乃ち堂下の曲直を判ずべし。惟だ仲尼にして乃ち百世の王を等すべし……今の理學を講ずる者、動もすれば好んで漢唐諸儒を評貶してこれを等差す。漢學を講ずる者、又た好んで宋儒を評貶してこれを等差す。皆な狂妄自ら量るを知らざるの習なり。

それにしても國藩が自己の過失を責める語氣の凄まじさは瞠目に値いする。友人の家を訪れ、その妾に諧謔の言を放ったことを悔いて、「放蕩此に至る。禽獸と何ぞ異ならん」（一八四三癸卯一月廿七日）と言う。この尺度を以てすれば、世界に禽獸ならざる人間幾人あるやを疑わしめる。

このような厳しい禁欲主義がどこから來たのか。人柄にもよるが、やはり程朱學の影響を無視することはできないであろう。清朝を通じて科擧は程朱學によつた。知識人の幼少からの教養は程朱學であつた。ただし考證學者たちは、科擧に通つてしまえば程朱學に背を向けた。國藩と同じく桐城派に屬する方東樹は、漢學の六蔽を數える（『漢學商兌』下）。その四は「程朱の檢身、動もすれば繩るに理法を以てするを畏」れる點である。この條はいみじくも清朝考證學者の氣風を言ひあてている。そして國藩はまさに、逆に程朱學に檢身の要を學ぼうとした人である。

四

辛丑（一八四二、三二歳）七月十四日、國藩は師の唐鑑に、檢身の要や讀書の法を問うた。唐鑑が答えて言う、「朱子全書を熟讀し力行せ

よ。經を治めるには一經に専心せよ。一經に通ずれば他經も自ら讀めるようになる。同時に數經を治めれば、一經にも通じ得ない」

國藩は唐先生の言にはよほど心服していたらしい。唐鑑は『易』を最も好んだ。國藩が若いころ熟讀しているのも『易』である。

日記のなかに唐鑑の言を引用することもしばしばである。辛丑七月十四日は詳しい。

「唐先生が言われた、第一に欺を戒めるべきだ。自己を蔽い隠すことがあつてはならぬ、と」

ちなみに國藩が心にもない世辭を非とするのは、それが自らを欺き他人を欺くものだからである（一八四二壬寅十月十四日）。中孚の卦 ䷛ を見ての感想として、中を虚しくてこそ不欺でありうる、欺とは心中に一物あること、私心のあることだ、という（十一月十五日）。

「先生が言われた、倭仁は篤實な人だ。一言一行、坐作寢食に割記をして、私欲に負けるようなことがあれば、すべて記しおいた、と」

國藩の日記が激しい自責に満ちること、右の先生の言が、その動機でないにしても、それに拍車をかける効果はあつたであろう。

「先生が言われた、外から身を取締まるためには整齊嚴肅の四字、内を守るためには主一無適の四字があるだけだ」

右に見える唐鑑の教えを忠實に反映するかの如く、日記には次のような記述がある。

壬寅十月十五日「友人竹如が言うには、敬の字こそ唯一の實踐の手段で、敬の要は嚴肅にある、と。自身を顧みると、莊重さとか威儀とかが全く無い。すべてがだらしない。獨り居るときは、暗闇のなかでも容貌を引きしめる氣持（『火滅修容』が必要だ）」

また、同年十月廿四日「主一がなぜできないのか。習うことが熟せ

ず、志が堅固でないからである。先ず心を統一することが肝要である」

敬といひ主一無適というのは程伊川の説いたところである。これだけではなお抽象的で、具體的にどのようにならねばならないか、必しも明らかでない。國藩は謹言と靜坐を工夫の階梯とした。「ふだん自慢や誇張の多い私が、急に啞になるわけにもゆかぬ。議論を少しづつ低くし、口を開くのに誠であることを心掛けて、狂妄の習慣を取除きたいと思う」(壬寅十一月九日)

國藩が日常、過ちを自責する場合に多く用いる語は、「可恥」(癸卯一月四日、八日、三月二日)、「愧恨」(壬寅十二月廿七日)、「愧極醜極」(壬寅十一月三十日)、「鄙極醜極」(壬寅十一月八日)など。罪惡と感ずることもないではないが、より多く醜いと感じ、恥しいと感じている。かつてベネディクト女史は罪の文化と恥の文化を對置して見せた(『菊と日本刀』)。女史は恥の文化のほうを低次元と見ていたらしいが、これは次元の差というべきものではあるまい。怒りに満ちた人格神に支配されるところに罪がある。唯一神がなくて、より多く人間の自律に任せられるところに、審美的な平衡感覺よりする恥がある。恥の意識が罪の意識より淺いとか低いとか言えまい。

恥とは隣り近所に恥じるだけでない。「俯仰天地に愧じず」とか「屋漏に愧じず」とかいう場合、對象は漠然としているものの、多分に宗教的敬虔に似た感情である。それに、特定的人格神に對する罪ならば、開き直ることも可能である。自分はどうせ罪人だから、好きなように罰してくれ、と言って寝ころんでもよからう。恥の方はそうはゆかない。罰する者が定かでないから、天地や屋漏や、あらゆる「目に見えぬ何か」に對して踴躍しなければならぬ。

朱子學の倫理では、自分に「善を行なえ」と命ずるのは、自分の理性だけである。理性は、自己の内部で人欲と對立しつつ、常に高く自らを持ち、自らを正しとする。もし神がいるとして、神の目から見れば、これはすでに傲りであろう。自己を律するだけならまだよい。自分分はこれだけの高さに達したと自負し、それで他人を律しようとするば、明らかに傲りとなる。戴震が「宋儒は理を以て人を殺す」(『孟子字義疏證』理)というのはその點である。理性の傲りは、理性自身によつては氣づかれまい。それに齒止めをかけ得るのは右の恥の感情であらう。國藩が火滅修容といひ謹言といひのは、恥の感情から来る。

癸卯(一八四三、三三歳)二月四月、唐鑑は國藩に教えて、「本朝の諸儒のうち最も醇正なのは、張履祥と陸隴其とである」と言つた。國藩は早速張履園集を讀んでいる。唐鑑撰『國朝學案小識』に載せる張履祥の語の二、三を拾へば、

「われら、起きてから寝るまでの言行に過ちはあらう。寝てから起きるまでの思慮に邪(よこしま)はあらう。この邪(よこしま)・過ちをすぐに改めることが、修身の第一要件である」

「わが心に忠實であることが誠。わが心に背くに忍びないことが敬。どんな時にもわが心に忠實であることが一」

「學問は欺かぬことから始まる」

「禮は敬を以て本とする。さすれば人欲は退き天理は還ってくる」張履祥の説く不欺とか敬とかは、まさに曾國藩が心を用いるところであつた。國藩は『楊園集』を讀むことによつて自己の修養の方向を再確認した模様である(癸卯二月五日、九日)。

張履祥・陸隴其は陽明學の弊を衝くことに努めた人である。唐鑑が『國朝學案小識』を編む時、特に意を用いた點は、陽明學に對して程

朱學の正統性を顯彰することであつた〔曾文正公文集〕二、書學案小説後。曾國藩もそれを承けて、表むきの議論では陽明學に批判的である。ただ日記を見ると、國藩は陸象山・王陽明の書物をもよく讀んでいる。意識的には程朱學の本流を歩むつもりではあつても、無意識に陽明學的な要素を身につけていた可能性はある。癸卯（一八四三、三三歲）一月廿六日の日記、

内人病い癒えず。余も亦た體舒暢せず。悶甚しく適せず。高景逸云う、凡そ天理は自然通暢と。予、今悶損此に至る。蓋し周身皆な私意私欲纏擾す。尙お何を以て自ら抜かんや。

高景逸は陽明學者ではないが、自覺せぬままに陽明學に深く染まつた人である（陸隴其『學術辨』）。その立場は、澄心默坐することによつて本來の面目を露呈せしめよう、というにある。右の「凡天理自然通暢」というのも、私欲を拂拭すれば、という前提が言外にあるにせよ、どこか直覺的・頓悟的である。

壬寅（一八四二、三三歲）十一月十四日。細思するに、神明は日の升るが如く、身體は鼎の鎮まるが如し。此の二語守るべき者なり。惟だ心の靜の極に到る時、所謂未發の中、寂然不動の體は、畢竟未だ眞境を體驗し出し來らず。意者只是れ閉藏の極、一點の生意を返出し來る。冬至の一陽初めて動く時の如きか。貞の固きや、乃ち元と爲る所以なり。蟄の坏がるや、乃ち啓と爲る所以なり。穀の堅實なるや、乃ち始播の種子と爲る所以なり。然らば以て種子と爲るべからざる者は、これを堅實の穀と課うべからざるなり。此の中に滿腔の生意、萬物皆な資りて我が心に始まるが若き者無ければ、これを至靜の境と謂うべからざるなり。然らば靜極まつて陽を生ず、蓋し一息生物の仁心を點するなり。息み息

んで靜極まるも、仁心は息まず。其れ天に參じ地に兩ぶの至誠か。

冬至の一陽云々は『易』復卦 ䷗ 初九を念頭に置いていである。復初九を靜中の動と見ること、元亨利貞を春夏秋冬に當てること、心を穀種に譬えること、すべて程伊川の『易傳』に見える。ただし滿腔の生意と言ひ、生物の仁心というのは、寧ろ程明道に基いているであらう。「萬物皆な資りて我が心に始まる」、萬物資始とは『易』乾卦象傳の語であるが、萬物皆資始於我心と言ふとき、忽ち陽明學に近似する。國藩が自分なりに修養の工夫を摸索するさい、より簡明直截な程明道・王陽明に無意識裡に接近することは當然有り得た。

國藩が『學案小識』に跋を書いたのは三十五歳のときである。ここには彼の哲學の基調が見られるであらう。

「天は人を生じて五常の性を賦與した。それは自身を善くさせるためだけでなく、世の中を善くさせ、天地の缺陷を繕わせるためである。それは日月星辰の秩序、萬民の生成、鬼神の秘密を窮め得るであらう。あらゆる草木鳥獸が従っているところの自然然則から、ひいては禮儀作法の末節に至るまで、皆なわが性分に具わっている。されば孟子は、萬物は我れに備わる、というのである。人はつまり天地の心（其也）である。」

聖人は萬物を知る智慧を有するが、やはり學問をして、博文と集義とに努めた。わが性分の一源を全うするためには、あらゆるものに即してその理を窮める要があるからだ。陸象山・王陽明は本心とか良知とかをかかげ、外に向かつて理を求める要はないと言ふ。しかし如何に巧みな大工でも規矩を廢するわけにゆかない。人欲の累ある中人としては即物窮理の努力を怠ってはならぬ。

前半の論調は甚だ明暢。その氣味は、なにか程明道・王陽明・劉蕺山に似ている。ただし、すべてがわが性が性に具わると言つて、わが心に具わるとは言わない點で、國藩はなお伊川・朱子の範圍内に踏み止まつている。彼としてもできれば直覺的に、萬物の備わるところの我れ、天地の心たる我れに悟入したかつたであらう。ただしそれは聖人でなければできない。人欲の累を免れぬ中人は、日常の實踐を重ねなければならぬ。そして、その人欲の累を痛いほど感じ取つていたのが曾國藩自身であつた。

五

ところで曾國藩の詩集を見ると、時として右の殿しい克己とは態變つた作がある。例えば二十五歳の歲暮雜感（『曾文成公詩集』卷二）、

紛紛たる節候、儘く平常、

西舍東家底事か忙しき。

十二萬年都て小劫、

七千餘歲亦た中瘍。

蜉蝣の身世知る何か極まらん、

胡蝶の夢魂又た一場。

少昊は儂が情の太だ寡なきを笑ひ、

故さらに綿繡を堆くして春光に富ましむ。

無限の時間との對比に於ては七千年と十年と差はない。まして人の一生は一場の夢。浮生の齷齪を忘れて、春の神の贈物を享受すべきであらう。次に三十一歳作の雜詩（卷一）、

早歳にして鉛槧を事とし、

傲兀として前軌を追う。

……
述作は韓愈を窺ひ、

功名は鄴侯に倣らう。

三公は渺かなること稗の如く、

萬金は腕すること麗の如し。

……

壯盛にして百も能くする無く、

老蒼眞に恥ず可し。

樽散は吾が甘んずる所、

多く是れ毛裏に慚ず。

體が大きいだけで役に立たぬという誹りは甘んじて受けよう。誤つて美譽を身に纏つても、おおかたは自ら顧みて實質の伴わぬことに赤

面するのが落ちだ。また三十三生日と題する詩（卷三）の句、

去日の行藏は雪を踏むに同じく、

迂儒の事業は沙を圍めるに類たり。

名山壇席都て分無し、

青門に傍いて瓜を種うるを學ばんと欲す。

著作を後世に傳え、天子に進講するなどは、身の程過ぎた望みだ。

漢の邵平に倣つて、隱居して都城門外で瓜でも植えて暮らしたい。

七千年中瘍、散木の樗、胡蝶夢は、『莊子』逍遙遊・齊物論に基く。

三十五歳、丙午正月二日作は、やや固苦しく、「仁に非ざれば敢て祖

とせず、義に非ざれば嘗て本づか」ぬ平生を述べ、「高明の眼に挂ら

ず、譏評せらるるも肯て少しも損」すまいと心に誓う。ところが終り

ころになると、卒然としてこう歌う、

浩蕩たり冠蓋の場、

一心自ら嘉遯せん。

嘉遯は『易』遯卦に見える。美しい隱遁生活。右は年齢のわかる諸作であった。二十五歳から三十五歳と言えば、或いは學業に精を出し、或いは翰林院・文淵閣・詹事府に眞面目に勤めていた時代である。三十二歳、十月十二日の日記で見れば、明々に「將來、衆に蒞む」ことを期している。

移居偶成の詩(卷二)はいつの作か明らかでないが、自分の年が前主の植えた藤の樹齡の半ばに達しないというから、それほど晩年でもあるまい。

此の身は今古履を脱ぐが如し、
人 人の弓を得る等閑耳。

眼を轉すれば花開き春事新たり、
四座唯だ延かん澹蕩の人を。

弓の比喩は『呂氏春秋』貴公篇を踏まえる。わが身がなくなつたと悲しむに當らぬ。大地がこれを受け取るからには我れに於て損はないといふのである。また毛西垣詩集の後に題する詩(卷二)には、

巨屨小屨は天の區する所、
焉んぞ能く屑屑として美惡を齊しくせん。

君に勸む酒を把りて雙螯を持し、
百年爛醉拚ちて嬉遊せよ。

學ばざれ陋儒の狗曲を談じ、
襪を修め巾を整え従らに碌碌たるを。

巨屨小屨は孟子滕文公に見える。ここでは鈍才天才の譬喩。雙螯は晉の八達の一入畢卓の故事に基く。狗曲はよくわからない。この詩は

最も欲望肯定的である。

これらの詩に見える隱逸の趣き、曠達の氣味は、實は古來、詩のテーマとして敷え切れぬほど繰返し歌われて來たものである。して見るとこれらの句は、單に作詩の世界の約束として『莊子』や『易』の典故を小手先だけで羅列したものではないのか。私はそうは思わぬ。これもやはり本心であるうと思う。學問に官職に精勵したり、性や阿片や圍碁(これだけは止まらなかつた)への欲望を絶ち切るべく煩悶したり、言語の過ちを神經質に反省したり、そうした苦勞の最中にこそ、ふと人生は短いのに何を齟齬とするのか、思ひのままに振舞つて何が悪いか、といった氣持が起つて當然かも知れない。

程朱學から行つても窮極は老莊流の恬淡の境地に至る筈である。そもそも程朱學は老莊をすでに包攝しているのだから。ただし方法としては正と負の關係にある。程朱は智を主とする。老莊は智を棄てよという。程朱は善惡を峻別する。老莊は一切の差別を冥同しようとする。程朱は覺醒に努める。老莊は忘却を願う。程朱の道は崎嶇として山を攀ずる如く、老莊の道は冷然として風に乗る如くである。

國藩は敢て崎嶇の道を選んだ。しかし時として路程の遠さに氣疲れを覺えることはなかつたか。内心の焦灼を坐ながらに忘れたいと願うことはなかつたか。そうした秘かな憧れを託するものとして、一見この人らしからぬ浩蕩放達の詩が作られたのであろう。

六

太平天國との戰鬪に参加してからの曾國藩の日記には、莊子の思想があらさまに出てくる。若い時から愛讀はしていたこと、詩で見てもわかるのであるが、儒教への信の手前、莊子への傾倒を表むぎの文

章で押し出すことはためらわれたのであろう。しかし戰場で死生關頭に立たされた時、莊子の死生を齊しくする哲學が、より身近なものになったに違いない。

戊午（一八五八、四八歳）十一月初三日。夜寐ぬる能わず。公憤私憂、展轉として懷を去る能わず。因りて思ふ、邵子の所謂觀物、莊子の所謂觀化、程子の所謂天地の物を生ずる氣象を觀る、要らず須らく大胸懷を放ち、心を物外に遊ばしむべし。乃ち能く一切繳繞鬱悒煩悶不寧の習を絶去せん。

邵雍の觀物とは『觀物内篇』。物を觀るのにわが心を以てせず、物を以て物を觀る。その間に我れは無い、ということ。莊子の觀化とは至樂篇。滑介叔は左肘に柳が生える奇病にかかった。介叔は「死生は晝夜。この病も大自然の變化の一端だ」として、平然と眺めやうた。程子云々は程明道。周茂叔が窓前の草を抜かせなかつた眞意を解釋して、斯く言う（『二程遺書』六）。いづれにせよ、自我を放下したところに現前する坦蕩の心境である。國藩の若い時の修養法、主一無適や整齊嚴肅が一種峭刻の氣味を伴うのと、感覺的に違っている。

ただ右のような高朗放達的心境に憧れることと、そうなれることとは別である。壬戌（一八六二、五二歳）九月十四日の日記によれば、國藩は、金陵の戦況が思わしくないために憂悶に堪えられなかつた。そこで反省して、自分には養氣の工夫が足りない、だから不動心になれないのだ、と氣付く。養氣・不動心は『孟子』公孫丑の語であるが、武人の心構えに適わしい。しかるに彼は續けて「養氣のためには、自ら反りみて縮きこと、行いが心に歇ること以外にない。行いが心に歇るためには、清・慎・勤の三字以外にない」という。この人には、やはり内向的な傾向が強くて、莊子や邵雍とはまだ距離があると言わざ

るを得ない。

功成り名遂げたあとも、自己を責める語は遂に絶えることがない。一例を擧げる、

己巳（一八六九、五九歳）八月廿日。念えば生平作す所の事、錯謬甚だ多し。久しく高位に居るも、德行學問、一も取る所無し。後世將に譏議交々加わらんとす。愧悔するも及ぶ無し。

そこで、同じ年の十一月十三日には、

偶ま韵語を作りて以て自ら箴して云う、心術の罪、上天と通ず。補救術なく、日暮れ道窮す。躬を省みて痛改し、命に順って勇従す。成湯の禱、申生の恭。資質の陋は、衆の指し視す所。翹然として自ら異とするは、故より恥を知らざるなり。遺忘を記纂し、文史を誦讀せん。且つ憤り且つ樂しみ、死して後已む。

躬を省みて痛改すということ、いかにもこの人の一生を要約するに適わしい。殷の湯王が五年の早に際し、身を犠牲にして桑林に禱ったこと、晉の太子申生が老父の心を傷つけまいと、繼母の讒言に辯解しなかつたこと、それぞれ『呂氏春秋』順民、『左傳』僖公四年を典故とするが、申生之恭というのは張載の『西銘』に據っているかも知れない。最初に、心術の罪、上天と通ずとある。有りふれた表現のようであるが、私は文字通り、天の神は心の中も見通した、と解したい。晩年の國藩は、人格的な神の降す賞罰といったものを信じたがっているようである。庚午（一八七〇、六〇歳）二月十一日の日記、

近來眼蒙により、常に昏聩の氣象あり。計るに靜坐に非ざれば、別に治法無し。因って一聯を作りて以て自ら警めて云う、一心に薄を履み深に臨め。天の鑒みるを畏れ、神の格るを畏れよ。兩眼をば日に沐し月に浴せよ。靜に由りて明らけく、敬に由りて強か

らん。

右の靜坐は若年の精神修養のためだけの靜坐とは事變り、治療法・健康法のためもある。道教の教義の中によくある『雲笈七籤』卷三四など。

大體が地獄などという語を輕蔑していた國藩であるが、晩年になるとそうした語を抵抗なしに受け止めるようになる。

庚午（一八七〇、六〇歳）五月十二日。福壽金鑑を閲す。偶ま一聯を作りて云う、戦々兢々、即い生時も地獄を忘れず、坦々蕩々、逆境と雖も亦た天懷を暢ぶ。

ところで先の己巳八月廿二日の箴の末句、且憤且樂。典據は『論語』述而であるが、彼なりの憤樂は如何なるものか。約一月前の日記はその點に觸れる。

己巳七月九日。細思すれば聖人は發憤して食を忘れ、樂しんで以て食を忘る。二者并び進む。固より未だ嘗て憂憤に偏し、窮年戚々たらず。今一も得る所無しと雖も、亦た嘗に所謂樂なる者を求めて以て自適すべし。上にして孔・顔の樂しみ。次にして周・程・邵・朱の樂しみ。又た次にして陶・白・蘇・陸の樂しみ。勉めて焉を企い、以て吾れの襟抱を擴げん。且つ憤り且つ樂しみ、以て吾が身を終えん。

道學者を詩人より上に並べているところは依然固いけれども、樂しみを正面から謳歌するようになったのは、明らかに變化である。死の前年、辛未（一八七一、六一歳）三月十六日、

因りて思うに近年焦慮過多、一日として坦蕩の天に遊ぶ無きは、摠べて名心太だ切、俗見太だ重きの二端に由る……今此の二病を去らんと欲すれば、須らく一淡字上に在りて着意すべし。特り

富貴功名のみならず、身家の順逆、子孫の旺否に及ぶまで、悉く天に由りて定まる。即い學問德行の成立する否とも、亦た大半は天事に關す。一概に淡としてこれを忘るれば、庶くは此の心稍や自在を得ん。

淡の字はさきの樂しみを更に集約して得たものであろう。

同じ年十一月廿九日、國藩は陶淵明・杜甫・韋應物・白樂天・蘇東坡・陸放翁の詩のうち閑適の趣きある作を擇んで一集とし、朝夕諷誦しようと考え。閑適の趣きは右の淡の字に通ずるであらう。ただし、折角の閑適詩を諷誦することが、沒利害の樂しみたるに止まらず、「名利爭勝の心を洗滌す」という役目を負わされている點は、いかにもこの人らしい。

七

曾國藩の祖父星岡公は、僧巫を信ぜず、地仙を信じなかつた人である（庚申十二月廿日日記。『文集』三、大界墓表）。國藩はこの祖父の遺訓を服膺した。日記を見ても佛寺に參詣することはあまり無い（觀光は別であるが）。佛經もほとんど讀んでいないようで、晩年に、楊文會の送つてくれた佛經を讀んだが頭に入らなかつたとか（一八七〇庚午十二月廿七日）、呂純陽注『金剛經』を讀むとか（一八七二辛未一月三十日）。いう記述があるくらいである。己未（一八五九、四九歳）十二月十一日の日記は佛敎に觸れる。

夜甚だ寐を成さず。因りて思う、天下の事、一々報を責むれば、必ず大いに望む所を失するの時あらん。佛氏因果の説、盡くは信ずべからず。因あれば必ず果ある者あり。亦た因ありて果なき者あり。憶えば蘇子瞻の詩に云う、生を治むるも富を求めず、書を

讀むも官を求めず。譬えば飲んで酔わざるも、陶然として餘歡有るが如し、と。吾れ更に爲めに數句を添えて云う、生を治むるも富を求めず、書を読むも問を求めず。徳を修むるも報を求めず、文を爲るも傳わるを求めず。譬えば飲んで酔わざるも、陶然として餘歡有るが如し。中に盡きざる意を含む、辨ぜんとして已に言を忘る。

修徳不求報の句は佛教の應報説への批判である。また『文集』巻二に聖哲書像記がある。

「佛教は因果應報を説く。そこで俗人は僅かに書を読めば、その報いとして祿や名を欲しがる。あたかも金貸しが高利を食るのに似る。甚しきに至つては、孔子は生前報いられなかつたが、死後に俎豆の祀を得たことで慰められると言ふ(例えば韓愈の處州孔子廟碑)。卑陋の見である。天は一々人の行なひに報いる暇はない。讀書しても官を得られないのは命である。孔子は道の行なわれぬことを憂いとしたが、同時に下學上達、俯仰天地に愧じぬことを樂しみとした。神に祈ることはしない。報いなど不要と思つていた。莊周(盜跖篇など)、司馬遷(『史記』伯夷傳)、柳宗元(天説)は、聖人の不遇に疑問を呈するが、これは聖人の本意を知らぬものだ」

右は道學の倫理からすれば當然出てくる論法である。善への報いは現世的な幸福ではない。良心の満足だけである。

しかるに『文集』巻一に見える紀氏嘉言序になると、やや違った角度から、應報説を肯定的に見る。

「聖賢の行爲は自己の安心を求めただけである。善を行なうにしても、何かを欲してではない。惡を避けるにしても、何かを畏れてではない。中人以下は勸善懲惡によらねば善い事をしない。そこで『易』

(坤文言)には、積善の家には必ず餘慶有り、と言ひ、『書經』(大禹謨)には、迪に惠えば吉、逆に従えば凶、と言ふ。これは水が低きに就くが如く、最も恒常的な道理である。

ところが秦以後、強横の氣が天下に充滿し、聖人も惡人も、ともに氣數の中を流轉する。理が氣に負けるようになった。善人が不幸になるのはそれである。これに乗じて佛教は、惡人も悔い改めれば功徳があり、改めねば地獄に陥る、と説く。人々は懺悔ということの容易さを悦び、見たこともない地獄を畏れて改心するのである。

天下の通理から言へば、儒教の言が正しく、佛教は妄説である。時の變から言へば、佛教にもまた儒教と等しい警世の功がある」

序文などは人に頼まれて作るものだから、本心でないという疑いも生じよう。しかしこの人の自戒の一つに心にもない世辭を言うことがあつた。それに『紀氏嘉言』とは、紀曉嵐の『閱微草堂筆記』のうち世教に裨益する話を擇んで編んだ書である。『閑微草堂筆記』は國藩晩年の愛讀書である(一八六〇庚午四月十九日など)。右の文章で少しおかしいのは、積善餘慶、恵迪吉從逆凶が天下の通理だと言ひながら、秦以後は行なわれなくなったことを認める點である。これは、三代を天理の世、秦漢以降を人欲の世とする道學の通念に引かれてである。注目すべきは儒教の教義の中で徳福の一致を説く部分を常則として強調する點である。實のところ徳福の一致は原始儒家からして既に疑われていた。まして道學のストイズムからすれば、なおさらである。善には福が、淫には禍が、ということとは、儒教成立以前から有る土着的な信念で、儒家よりは寧ろ墨家や道教など庶民的な部分に温存されたものである(拙稿「陰陽」、『人文研究』十の二)。

曾國藩は佛教の天堂地獄、來世といった觀念を信じなかつた。しか

し陰徳陽報とか、善の報いが本人に及ばずとも、子孫には福があると
 かいう道教的信仰をひそかに抱いていたらしい。若いころ、毎日、各
 種の書物から善言を抜き書きすることを日課にしていたが、そのなか
 に『陰隲文』がある（一八四一辛丑八月十三日、十六日）。『陰隲文』は道
 教系の教訓書、いわゆる善書である。

戊午（一八五八、四八歳）六月、日付のない覚え書きの部分に、

攻は殺を召し、伎は殺を召し、吝は殺を召す。孝は祥を致し、勤
 は祥を致し、恕は祥を致す。

とある。自作か、何かの抜き書きか明らかでないが、考えかたは全く善
 書的である。『詩集』卷一に伎求詩『論語』子罕、『詩』雄雉に不伎不求
 とある）と題する作がある。

善は怒より大なるは莫く、
 徳は妬より凶なるは莫し。

.....

爾の室に神は來り格る、
 高明は鬼の顧みる所なり。

.....

嫉妬の心を消除すれば、

普天は甘露を零さん。

これは最も素直な有神論的應報説である。國藩が日常、城隍廟に參
 詣していたことは前に觸れた。表むきの議論はどうであれ、國藩の内
 心には意外に素朴な土俗的信仰が生きていたようである。

善因善果は原則である。しかし時としてそうならぬこともある。そ
 れは運命である。己巳（一八六九、五九歳）十二月廿二日の日記に言
 う、

「古來、聖哲名儒が譽を輝かせたのは、文學と事功による。しかし
 文學は、資質が七割、人力が三割。事功は、運氣が七割、人力が三割
 を占める。天が我れに賦したものを保つ、例えば洪範にいう肅・父・
 哲・謀・聖の量を全うすること、父子・君臣・兄弟・夫婦・朋友の道
 を盡すこと、これは我が努力が七割を占めるから、一心に追求せよ。
 三割しか人力の及ばぬ文學や事功は、しばらく不急と見よ。さすれば
 名を求め勝ちを争う心は止むだろう」

右はまだ儒家の本色に沿っている。ところが國藩は人相を信じたら
 しい。戊午（一八五八）六月の覚え書きに「端莊厚重是貴相云々」という
 相法の簡條が見え、同年十月廿八日の日記には、兵士の名を三人あ
 げ、履歷を記したあとに、人相とそれに對する判断を附する。昔の儒
 者、荀子は相法を信じなかつた（非相）。國藩は呪術的なものに懷疑的
 だつた筈であるが、相法は別らしい。

戰爭中、國藩は時々卦を立てている。壬戌（一八六二、五二歳）九月
 十一日、祁門の失陥を憂えて一卦を占し、觀の晉に之くに遇つた、
 と。『易』は占いの書であるが、朱子は占いということに嚴しく制限を
 加えた。道義上なすべきことは断じて行なうべく、占いに頼るべきで
 ない、と『朱子語類』七三。國藩が戰國中に成敗を占うこと、朱子の
 目から見れば如何なものかと思われるが、當人はそのような躊躇はし
 ていない。相法といい、宿命論に強く惹かれるところがあつたのこと
 であらう。

さらに甚しい例として、己巳（一八六九、五九歳）七月十八日の日記
 を示す。

偶ま思ふ、咸豐八年四月、葛嶺山にて扶乩（ふき）せしに、即ち己に是の年
 十月の三河の敗、溫甯の變有るを預知せり。天下の萬事は皆な前定

す。絲毫も人力を以て強求する能わず。紛々たる思慮、亦た何ぞ補わんや。以後毎日、當に樂天知命の四字上より用功すべし。事を治むるには日に恒課あり。心を治むるには能く天命に任ず。兩者兼ね圖り、吾れの身を終えんのみ。

凌十一の長沙に歸るを送る詩『詩集』(二)にも、

世間萬事皆な前定、

行止遲速は自由に匪ず。

とある。三河の敗戦は國藩にとつて痛恨事だった筈。晩年の國藩は、それをしも既定の運命として淡々と受け止める。これを裏返せば、太平天國が平定されたのも、國藩自身の力によるのでなくて、彼らが誅せらるべき運命が前定していたことになる。晩年、位、人臣を極めたあとの日記に、自分は一生何もしなかった、という意味の語がしばしば見える。初め私は、謙辭にしても度が過ぎて本心ではあるまいと思つたが、右の「天下萬事皆前定」という句を見るに至って疑團水解した。

若年の國藩の詩に見えた曠達の氣風も、右のような、すべては運命とする諦觀において著落を得るのであらう。

(本稿は、昭和五二年七月、阪神中哲談話會に於ける發表の要約である)